

意思決定尺度を用いた女性の地位形成に関する研究

千葉聡子（日本女子大学大学院）

1. 研究の目的

女性の役割や地位の変化が指摘されているが、実際にその変化を認識するためには、認識のための具体的な指標や尺度が必要である。階層移動研究を代表とするこれまでの研究では、教育（学歴）、職業（威信）、所得が個人の地位を把握するための主要な指標として用いられているが、これらの指標は経済的側面に重きが置かれ、また男性を主な対象として作られているため、個人としての女性の地位測定はこの指標では難しく、女性の地位やその変化は家族員を媒介として測定される、などの問題を有している。

そこで本研究では、こうした問題を縮小するために、新たな指標として、社会的勢力のひとつの現われである意思決定力を取り上げ研究を進めた。具体的には、①「仕事場」「地域」「家庭」の三つの領域における意思決定の状況を把握する地位測定尺度としての意思決定尺度を作成し、②調査票を用いた調査を行い、意思決定への影響力の状況の把握、および意思決定尺度の特性と有効性の検討を行い、さらに、③意思決定力に対する成人学習の効果、について分析、考察をした。

意思決定尺度は、多数の意見を収集し、それぞれの意見に対する複数の判定者による判定の平均値（あるいは中央値）を尺度の目盛りとした、間隔尺度を作成するサーストン尺度構成法により作成した。本研究では「仕事場」「地域」「家庭」での「物事を決める場面」を収集し、項目ごとに重要性を基準に判定者に評価してもらい項目それぞれの尺度値を決定した。さらにプリテストによる検討を経て、「仕事場」30項目、「地域」20項目、「家庭」33項目の意思決定尺度を構成する項目として決定した（尺度を構成する具体的な項目と項目それぞれの尺度値については当日配布の資料を参照していただきたい）。

なお尺度作成に関しては、昨年度の第46回大会で報告しており、本報告では作成した意思決定尺度を組み入れて行った調査の結果について報告したい。また本研究は、平成6年度の財団法人東京女性財団研究助成を受けて行った研究である。

2. 調査の概要

調査は成人男女を対象に調査票を用いて行い、意思決定尺度によって算出される意思決定力値を中心に分析を進めた。

なお意思決定力値は、意思決定尺度を構成する個別項目が示す決定に際し、「自分にはどの程度の影響力があるか」を4件法で答えてもらった結果を意思決定尺度の個別項目についた尺度値に掛け合わせ、「仕事場」「地域」「家庭」の領域ごとに数値をたしたものを、無回答を除いた回答項目数で割る（＝平均値）ことで算出される（意思決定尺度の示す場面を実際に経験することがない場合は「まったく影響力がない」に回答してもらった）。意思決定力値の値が小さいほど意思決定への影響力が強い。

●調査時期 1994年12月～1995年1月

●調査方法 機縁法による託送調査

●調査票の配布数および回収状況

配布数 800票、有効回答数 518票(64.8%)

●回答者のプロフィール

①性別 男性 38.6%(200人)、女性 61.4%(318人)

②年齢 20代 13.7% 30代 26.1% 40代 24.1%
50代 23.0% 60代 11.2% 70歳以上 1.9%

3. 調査結果

(1) 3領域での意思決定力の状況

まず「仕事場」「地域」「家庭」での意思決定への影響力の状況を男女別にみると、地域、家庭の2領域で女性の方が値が小さく、領域からみると女性がより強い影響力をもっていることがわかる（表1参照）。

また女性についてより細かくみると、フルタイム既婚女性は地域以外の2領域での値が小さく、仕事場、家庭での意思決定力の強さが認められた。これに対して専業主婦は、家庭での意思決定場面においてフルタイムやパートで働く女性よりも影響力が弱く、このことから、仕事と家庭での意思決定への影響力は単純なトレードオフの関係ではなく、意思決定で示した勢力の構造がより複雑であることが予想される。また地域については、個別の項目の回答状況から、全体に「影響力がない」と答える傾向が強いが、専業主婦の影響

力が比較的強い。結婚していない女性については男性と似た状況がみられる。

さらに成人学習の経験の意思決定への効果については、数値が示すようにその効果が認められる。

表1 意思決定への影響力の値(=意思決定力値^{*1})

	仕事場意思決定力値	地域意思決定力値	家庭意思決定力値
男性(N=200)	574.39	1004.28	516.22
女性(N=318)	738.09	992.15	476.17
フルタイム職(N=54)	678.14	1011.52	385.51
パートタイム職(N=65)	817.09	977.00	404.02
専業主婦(N=85)	—	929.23	432.26
結婚していない(N=90)	710.90	1073.39	635.19
姓・学習(N=272)	734.64	984.62	468.35
姓・学習(N=40)	767.18	1068.16	535.94

*1 意思決定力値は低いほど意思決定に対する影響力が強い

(2) 地位評価と関連する要因

次に表2は自分の地位を高いから低いまで4段階で評価した地位評価と、関連する要因との順位相関係数を示したものである。男性では、個人所得や仕事の役職という本人の仕事に関係した要因との相関が比較的強いのにに対して、女性は世帯や配偶者に関係した要因との相関が比較的強い。

表2 地位評価<高>との関係

	男性	女性	フルタイ	パートタイム	専業主婦	結婚していない
仕事場意思決定力値 ^{*1} <低>	0.12	0.15	0.27	0.25	—	0.25
地域意思決定力値 ^{*1} <低>	0.04	0.21	0.33	0.06	0.08	-0.02
家庭意思決定力値 ^{*1} <低>	0.26	0.12	0.07	-0.14	0.06	0.03
個人所得<少>	-0.30	0.10	-0.00	-0.03	0.03	-0.14
世帯所得<少>	-0.16	-0.24	-0.21	-0.15	-0.22	-0.26
学歴<低>	-0.19	-0.19	-0.22	-0.32	-0.15	-0.26
配偶者の学歴<低>	-0.00	-0.22	-0.17	-0.24	-0.16	—
仕事役職<低>	-0.30	-0.16	-0.27	0.07	—	-0.39
学生時代の友人からの相談頻度<多>	0.16	0.28	0.53	0.44	0.05	0.23

しかし、これらに次いで、男性は「家庭」、女性は「地域」の意思決定力値との相関が強く、また女性は「学生時代の友人からの相談頻度」との相関が最も強いという結果を得た。さらに、女性の属性別の結果をみると属性により関連する要因はかなり異なること、などの点から、男性の地位も含め、学歴、職業威信、

所得といった従来の要因のみでなく、よりひろい観点から地位形成要因を考察していくことが重要だと考えられる。

4. 意思決定尺度の意味

(1) 社会的資源としてのコミュニケーション要因

さて女性の場合、「学生時代の友人からの相談頻度」と地位評価との関連が最も強いという結果であったが、調査では、「職場、仕事に関係した人」「地域の人」「家族」から相談される頻度も質問している。これらの相談頻度と対応する3領域の意思決定力値との相関係数をみると、女性の場合、それぞれ0.44, 0.55, 0.37といずれも他の要因との関係に比べ相対的に高い値を示している。また男性についても高い値を示す領域があった。

相談頻度をその人のもつ信頼性やコミュニケーション能力を反映したものと考えるならば、相談頻度というコミュニケーション要因、意思決定力、地位評価の三者の関係に注目することは重要になる。特に女性の地位形成との関係から、今後、社会的資源の一つとしてコミュニケーション要因を考慮していく必要があることを指摘したい。

(2) 生涯学習社会での地位形成

意思決定尺度の作成は、女性の行っている役割を地位として認識するための道具を手に入れるという意味をもっているが、同時に、意思決定尺度は生涯学習社会での地位形成や地位変化を認識するためにも有効な道具となるのではないだろうか。これまで地位測定に用いられてきた学歴、職業、所得は、学校卒業までの期間に得た資源を用いて形成される側面が強く、学歴社会を前提として使用する尺度といえる。これに対し、3領域の意思決定尺度は、学校卒業後の経験や学習によって得た資源の配分状況を知ることの有効である、と考えるからである。

女性の地位がそれを測定する尺度がないがために認識が難しいのと同様に、学校卒業後の学習や日常生活での経験によって生じた役割や地位の変化を認識するための道具がなければ、生涯学習社会はいつまでも実現されない。意思決定力の形成、コミュニケーション能力の形成の分析を通して、生涯学習社会での地位形成や学習の意味についても考察を進めていきたい。